第34号

会報　めいおんの会

令和4年12月1日
「めいおんの会」（名古屋音楽大学出身教員の会）
事務局発行　　責任者　　会長　川合　恒之

「めいおんの会」という繋がり

会長　川合　恒之（名古屋音楽大学特任教授）

この度、「めいおんの会」会長を拝命いたしましたので、ご挨拶をさせていただきます。

改めてこの会の発足当時の事を思い返してみました。前会長の百合草先生から「名古屋音楽大学の卒業生で教職に就いている人たちの会を作りたいのだけれど」というお話をいただいた時、やはり最初に思い浮かんだのは、音楽を中心に、学校教育についてさまざまな研修や研究を行う集まりでした。ただ、そういったものはすでに存在するし、何かもっと違う意味を持った会はできないだろうかと思いました。そんな時、音楽の教師が集まる機会で、たまたま名音大の卒業生であることが分かり、懐かしさとともに、何とも言えない親近感を感じたことを思い出しました。同窓であるという、たったそれだけの事ですが、急に話しやすくなり、相談しやすくなり、協力できる環境が生まれたように感じました。音楽の教員は、学校に1人ということも珍しくありません。自分自身も、相談する相手がいなくて、途方に暮れたことがありました。この会の一番の意味、そして目的は、「ネットワーク」だと確信しました。

今年で発足から14年目となりました。研修会は名古屋音楽大学を会場に大学の先生方に講師をお願いして行っています。研修が一番の目的ですが、年に1度、母校の事を一緒に思い出せたらという思いも込められています。名古屋市の教員のみで始まったこの会ですが、現在は多くの県の方の参加もいただいています。実際の距離を一気に縮めてくれるSNSという手段があります。今後も多くの同窓生と繋がることで、支え合っていけるような「めいおんの会」を目指して行きたいと思っています。

退任に当たって

前会長　百合草　薫

この度、「めいおんの会」会長を後輩に譲ることにいたしました。本会発足以来、13年間お世話になりました。おかげさまで、大過なく運営してこれたのも会員の皆様を始め、名古屋音楽大学の先生方の温かいご理解とご協力の賜物と深く感謝申し上げます。

さて、私は中堅の頃、同僚の教員から「卒業大学の先輩後輩の繋がりはとても大事だよ」と教えられたことがありました。当時はあまり気にしていませんでしたが、学校運営に責任を負う立場になってから、「名音卒業の後輩のためにもこうした繋がりがあったら」と強く思うようようになりました。早速当時の学長大口光子先生、学部長故田中省三先生、教職担当の先生に教育界の現状や私の思いを話し、また同窓の教員仲間とも相談をし、立ち上げたのがこの「めいおんの会」でした。平成21年（2009年）8月のことでした。「他の音楽の研究会にはないことをやろう」ということになり、名音大の先生を講師に招いて研修会をすることにしました。ガムラン、オペラ、合唱、鍵盤ハーモニカ、箏、長唄、三味線、パイプオルガン、ジャズ、音楽療法等の研修。そしてその中味は講師の演奏とお話、それに実技研修。それらには、授業に役立つヒントもあり、実に贅沢な内容の研修会でした。今ではこうした研修会やＳＮＳを通して、会員同士の交流が生まれてきています。

今後は事務的な仕事をお手伝いさせていただきながら、顧問として側面から支えてまいりたいと思っています。会員の皆様のご活躍並びに本会の発展を祈念してご挨拶とさせていただきます。

令和4年度　役員・参与・顧問（敬称略）　*～よろしくお願いします～*

会長　　川合　恒之（名古屋音楽大学特任教授）会計　斎藤　玲子（名古屋市教育センター指導主事）
副会長　藤松　眞人（名古屋・笹島中拠点校指導教員）会計監査　中村由美子（名古屋・宮中教諭）
同　　塚寄　崇史（名古屋・守山西中教諭）　参与　佐藤　惠子（名古屋音楽大学学長）
庶務　　宇佐美ほたか（名古屋・守山中教頭）　同　清水　皇樹（同音楽学部長）
同　　平賀　真司（名古屋・笠寺小教諭）　顧問　百合草　薫（名古屋・東丘小トワイライト）

総会・研修会　８月６日（土）名古屋音楽大学　ホールＤＯ

総会では、会則に従い、会長の指名・役員の委嘱を行いました。昨年度の事業報告、決算報告並びに本年度の事業計画案、予算案が承認されました。

研修会は「発達障がいのある子どもへの音楽療法」と題して、名古屋音楽大学准教授の猪狩裕史先生を講師にお迎えして行いました。

前半は音楽療法の理論について教えていただきました。ギター大好き少年であった先生が、音楽療法と出会うまでのお話で始まりました。「大好きな音楽でこんなに喜んでくれる人がいる」ことで、音楽療法を天職と感じられたお話から、先生の人柄を感じることができました。そして、発達障がいのある子どもたちには、「やった」「できた」と言うような成功体験を保証してあげることが大切で、その成功体験に繋がる編曲上の留意点を教えていただきました。リズムやメロディーそしてハーモニーについて、詳しい説明と伴に、動画による活動を紹介していただけたので、その効果を目で見て確認することができました。

後半はワークショップを行いました。実践を経験することで、障がいのある方とどのように関わるかを実感することができました。最初のグループはトーンチャイムを使って「音のキャッチボル」を体験しました。グループ全員で音を伝え合いながら、音の回数やリズムを変えたりするなど自由度を増やしていくものでした。最初は恐る恐る音を出していましたが、猪狩先生のギターの伴奏が入ってからは、それぞれが思い思いの表現ながらも、何とも言えない一体感が生まれてきたように思います。後半のグループは即興演奏のリレーを体験しました。リズム担当とメロディー担当に分かれ、「メロディー楽器は指１本か目をつぶる」リズム楽器は「正しくというよりは面白く鳴らす」など、音楽専門の参加者には、かえって難しい設定で戸惑いがありました。しかし、演奏が進むにつれて、先生のキーボードに合わせ、それぞれが自由な発想でソロを回すことができていました。どちらの体験も、最初こそ固い表情が見られましたが、徐々に笑顔が見られ、楽しく学ぶことができたようです。

最後に、参加者の質問に答えていただきました。サウンドブロックやアイパッドの活用などの紹介とともに、「障がいのある子どもたちだけで演奏するのは、偏見や差別をかえって助長しているように感じる。一緒に演奏することで音楽的にも豊かになり、障がいのある人も輝く」というお話が心に響きました。みんなで支える社会を私たちも目指せたらと思います。

発達障がいの子どもたちへの対応だけでなく、すべての音楽指導に共通するヒントをいただくことのできた素晴らしい研修になりました。